

日本山岳会への提言

豊饒だった登山文化と高齢化

横山厚夫

かつて日本が登山ブームに湧いた時代があった。その指導的役割を担ったのが日本山岳会である。当時の一端を知る横山厚夫氏に、かつての日本山岳会の雰囲気を取り返し、最近の高齢化の問題を含めて今後の会のありかたを展望してもらった。

先夜、会報編集委員長の神長さんから電話があった。日本山岳会(以下、会)の現状と将来をどう考えるかと尋ねられて、二、三、思いつきを答えると、それを『山』に書いてくださいという。もし、それが「日本山岳会への提言」などと表題がつくとするならば大変だ。私の任にあらずと再三固辞し

たにもかかわらず、電話が終わったときにはなんとなく承諾する羽目になっていた。

近郊の山がほとんどで大した山に登っているわけでもないし、確かに会歴は長いにしろ会の運営に関わるような仕事はなにひとつしてこなかった。会は人使いが荒いと聞き、捕まっては大変とあえて

ルームに顔を出さないようにしていたふしもある。わずかの期間、図書委員会の片隅にいただけにすぎない。いわば典型的なノンポリにすぎない私が、ここで、なにをどう書いたらよいのだろうか。

散々迷ったあげく、大勢の会員のなかには私のような一人もいて、その人間が今までもずっと会員であったことをどう考え、さらには会の現状と将来をどう考えているかを正直に書いてみることにした。

以下は私の極めて個人的な見解にすぎないことをお断わりしておき、また、銀色の縁取りをしたバツジが送られてきて自分でも驚くような歳になれば、少々の昔話が混じることもお許しいただきたい。

私の入会は1956年、山登り

を始めてから6年目の年だった。

動機の一つはヒマラヤ登山に關しての知識を得たかったからである。会の登山隊がマナスルの初登頂に成功したのはその年の5月のことで、当時の「山岳」や会報にはヒマラヤの記事が充満していた。少し格好よくいえば「隅田川の水はテムズ川に続いている」式に、実際に登るのは奥多摩や奥秩父の中級山岳どまりにする、やはりヒマラヤの山々は大きな憧れだった。その探検や登山記録に読みふけていると、気分高揚、マロリー、アーヴィンの最後の登高のくだり、あるいは候文きこうぶんに訳されているスコットの遺書などにはいいようなない感動をおぼえたものである。それに、もう一つの動機に、自分の名の下に「日本山岳会会員」



会の先輩と交流を深め、伝統を育む「有志閑談会」。1953年6月14日に開かれた第1回。出席者は、冠松次郎、田部重治、松方三郎、武田久吉、高野鷹蔵、日高信六郎、村井米子ら(順不同)

と付けてみたい娑婆つ気が全くなかったといえば嘘になる。

それから約半世紀がたった今日、振り返ってみれば、私は会から大いに恩恵を受けてきたことに気づく。各種の集会や講演会も気が向いたときに出る程度のものであったが、新知識を得たし啓発もされた。個人ではなかなか行きにくいペテガリや能郷白山などに登ることができたのも、支部主催の山行に加えてもらえばこそだった。

そしてなによりもよかったですと思うのは「人」と知り合えたことである。そうしたなかには、すでに故人となった何人かの方々もおいでだが、今、そのお顔を思い浮かべれば、直接話したことのある無しにかかわらず「いろいろ、ありがとうございます」と厚くお礼を述べたくなってくる。

私が入会した1956年は、まだ会ができてから50年ほどにしかなっていない。7人の創立発起人のうち4人の方々が存命で、なお、会の中核として矍鑠と活躍される方もあり、晩餐会などで遠く仰ぎ見ることもあった。

さらに早くから会にあつて奥秩父のパイオニアとして活躍された田部重治さん、中村清太郎さんの顔はとくにまぶしかった。例えば、その昔の明45(1912)年春、大菩薩北面大黒茂谷での遭難は本で読めば登山史上の出来事にはすぎないが、その当事者であるお二人に集会の席上などで実際にお目

にかかれば、うーんと唸るしかない。そして、尋ねてみたいことも少なくなかった。活字で読むのと直接話を聞くのでは大違いである。

しかし、私はそれをしなかった。なんとなく近づきたい気がしたためである。こちらから謙虚に声をかけ教えを乞えば、惜しみなく答えてくださったに違いない。のちに東京から見える山の本を書いたとき、その先駆者の一人の中村さんにお送りすると「遊びにいらつしやい」との電話があつたにもかかわらず、やはり逡巡のあげくに失礼してしまつた。

こうしたことは、ほんの一例だが、いまは大いに悔いが残る。あのとき、大先輩であろうとも遠慮なく聞いておけばよかつたと残念でならない。

今の時代は物怖じしない人々が増え、かつての私のような妙な遠慮をする風潮も薄れていよう。なにごとく尋ねれば、親切に、そして存分に答えてくださる方々が会にはたくさんいらつしやる。

後年、望月達夫さんを通じて藤島敏男さんと知り合うようになったが、近頃、木暮理太郎さんの事

跡を追うようになってとくに残念に思うのは、なぜ、藤島さんが存命のうち木暮さんのことを聞いておかなかつたかである。このお二人はいつしよに利根源流の山を歩いていて、その折、どのようなものを食べ、どのようにして山で寝ていたかなども、本だけではなかなか知りにくい事柄である。木暮理太郎像も、藤島さんの口からじかに聞いてみたかつた。当時、私には、まだ尋ねるだけの知識がなく、いまはもつと若いうちから勉強しておけばよかつたと後悔するばかりである。

なお、時には会特有のエリート臭に辟易することもあつたが、それはドブ板踏んで出てくるような家の生まれである私だけの僻目かも知れないと、これは蛇足。

そして昔事ばかりでなく、今日、時折の山で行をともし、街で語るのも、そのほとんどが会で知り合つたよき友人たちであることを、とくに強調しておきたい。

古い会報の頁をめくっていると、会がいかに早くから蔵書の充実に力を入れてきたかがよく判る。「日本山岳会の名に相応しい内容の整

った図書室」を育てあげるべく図書基金を創設し、「本会の図書室を勤くとも本邦に於いて最も完備せる山岳図書館たらしめるため」に多くの会員が努力してきた。そうした蔵書のすべては1945年5月の戦災によって一時烏有に帰したが、その後の努力によって、現在、ご覧の通りの図書室にいたっている。

私が会に入ってよかったと思うのは自由に図書室が利用できたことであり、会の存在理由の一つに、質量ともに充実した図書室を持つことにあるのではないかとさえ考えるようになった。先日、志賀重昂の文章を少し調べたくなって図書室にいくと、その全集まであったのには感激した。

しかし、なお不満は少なくない。和書洋書を問わず、こんな本もないのかと思う場合もしばしばである。私が会の将来に強く望むことは、よりいっそうの蔵書の充実である。誰もが読みたい調べたいと願う山と探検関連の本がみなそろっていてこそ、会の図書室ではないだろうか。蔵書は本そのものばかりではなく、入れ物や管理に多大の費用がかかるが、一過性の催

し事よりも、これからの会員のためにも長く役立つのが完備した図書室だと確信する。

毎月の「山」を開き新入会員の年齢に目をとめるたびに、会も日本の縮図だから、高齢化は仕方のないことかと思う。「山岳」第百一年の後記に南川金一さんが「本誌の編集委員は81歳を筆頭に、平均年齢68歳」と書き「頼りになる若い働き手がいらないような組織は、動脈硬化をきたした人間の身体と同じであり、そんな組織に明日はないだろう」と続けているのには私も同感だ。はたして5年先、



1964年8月19日、東京・渋谷の外苑コーポにあった山岳会ルーム。車座には、松方三郎、日高信六郎、神谷恭らの顔が見える

10年先の会はどうなっているのだろうか。本会会員にも「定年後は山歩きを愉しみなさい」「若さの秘訣は山歩き」などの著書があるくらいなのだから、今後も自分のあいだ会員の平均年齢を格段に上げる若者よりも、高齢者のほうが多く入会してくるだろう。しかし、それをいま考えてもどうなるものでもないだろう。あるがままの現実を受け入れ、そのなかで最大の努力をしていくより他はないと思う。ただし、年寄りにありがちな頑冥固陋(こつこつ)にならないこと。

そうしたなかで、「山」の頁を開いてみれば、百年史配布の囲み記事の中に「不要な方がおいででしたら予め事務局にハガキで申し出て下さい」などという不思議な一文があつて仰天するような場合があるものの、総じて今の会はよくやっていると私は読んでいる。種々の集会和登山の報告もよし、さらには人を得た懇話会や懇談会のお知らせもよし、図書交換会の復活もよし、である。

宮下啓三さんは「山とスポーツ」(「山岳」第百年)のなかに「登山家になることを許されなかつたらスキンのようなタイプの人にも居

心地のよい「山岳会」、それを私は二十一世紀の山岳会の姿としてイメージしてます」と書いてあるが、私も会の将来はそうあつて欲しいものだと思う。さらには今の世の中にややもすると欠けていると思われる、ある一線を越えてはいけないという限度を心得た運営をのぞんでいる。

前記の藤島さんは望月さんにいわせると「クラブから受けるものは常に無形の良さであることを強調し、その反面クラブから収奪することは、有形無形を問わず、極めてこれを忌み嫌った」人だったそう、私も耳が痛い、会員も会自体もこの言葉に値するものであつて欲しいものである。

近々、執筆や編集に携わった方々の長年にわたる努力の末に会の『百年史』が上梓されるといふ。興味がなから読まない、いらぬなどというのではなく、ここで、もう一度、この会がどういう百年の道程をたどつて今にあるかを確かめるためにも、その熟読をお勧めしたい。私も、そうするつもりである。